

【試し読み】 Eランクの売れ残りカントボーイ、怖くて
デカイ極道に引き取られて人生終了かと思ったら、溺愛
開発の末に本妻として囲われました♡

「これじゃあ、売り物にならないな」

軋む粗悪なスプリングの音と、機械的な腰の律動。申し訳程度に敷かれた薄いシーツを握りしめながら、早くこの拷問が終わることだけを願っていた。

男の身体に備わってしまった、愛玩用の裂け目。そこに無理やり肉棒を押し込まれるたび、引き裂かれるような鈍痛が走る。愛撫もろくにないまま穿ち終えた感度調査師は、心底うんざりしたため息と共に、残酷な査定結果を吐き捨てた。

「ツバキ。お前は——Eランクだ」

「っ……！ はあっ、はあっ、……！」

弾かれたように跳ね起きる。荒い息が喉を焼き、安物のペラペラな寝間着が冷や汗で肌に張り付いていた。

まだ夜明け前。多人数用の薄暗い大部屋では、同じ境遇のルームメイトたちが死んだように寝息を立てている。首筋に手をやると、冷たいプラスチックのプレートが指に触れた。そこに刻まれているのは、最低ランクを示す『E』の文字だ。

（また、あの日の夢か……）

カントボーイが『愛玩動物』として金で取引される世界。

美貌、血統、そして何より『抱かれてどれだけ啼くか』で値打ちが決まるこの場所で、僕の身体は粗大ゴミ同然だった。

キャバ嬢だった母親譲りの顔立ちだけは褒められたけれど、親の素性も知れぬ野良同然の血筋。そして二十歳を迎えた日の感度調査で押された、「感度不良」「開発不能」の烙印。

二十五歳までに買い手がつかなければ、待っているのは『廃棄処分』——裏社会の実験台か、あるいは臓器の解体処理場行きだ。

僕に残された猶予は、あと五年。

けれど、いわく付きのEランクをわざわざ金を出して買う物好きなど、まともな人間のわけがない。買い取られたところで、待っているのは暴力と鬭り殺しの日々だと誰もが知っていた。

(起きてると、碌なこと考えないな……)

冷えた膝を抱え込み、無理やり瞼を閉じる。それでも、耳の奥にこびりついたベッドの軋みと、遠くない未来への冷たい絶望が、ひたひたと忍び寄って来る足音は鳴り止まなかった。

「起きろ！ お客様のお見えだ」

荒々しく蹴り開けられた鉄の扉が、湿った地下フロアに甲高い音を響かせる。

この『ペットショップ』では、月に数回、買い手を招いたカントボーイのお披露目会が行われる。ランク順に分けられたフロアに並ばされ、家畜のように品定めされる屈辱の時間だ。

買い手たちの目当ては、いつだって最上位のAランク。「失敗したくなければC以上を買え」というのが相

場であり、僕たちEランクの檻にまともな客が足を止めることなどあり得ない。

「ねえ、ツバキ。今日は楠組くすのきぐみの人が来てるらしいよ」

膝を抱えて隣に座る少年が、震える声で耳打ちしてきた。楠組——この界限の裏を牛耳る指定暴力団。引き取られれば八つ裂きにされるだの、逆に贅を尽くした愛玩を施されるだの、真偽不明の物騒な噂が絶えない巨大組織だ。

「……どうせAランクのフロアに行くだろ。僕たちのところに来るのは、いつも変なブローカーばかりじゃないか」

この最下層の部屋に降りてくるのは、脂ぎった肌に安物のジャージを引っかけた、片言の日本語を話す怪しい男たちだけ。買われたら最後、パスポートを奪われ、国外の違法風俗に売り飛ばされて二度と戻ってこられない。

重い防音扉が開き、職員のへつらうような声と共に数人の男たちが入室してきた。

カビと餿えた匂いが立ち込める淀んだ部屋に、ぞろぞろと入ってくる下卑た男たち——その先頭に立つ人物の

姿を捉えた瞬間、僕の呼吸は喉の奥で凍りついた。

この薄暗い吹き溜まりには、あまりにも場違いすぎる異質な存在。

群れの中で頭一つ抜きん出た、十九〇センチ近い圧倒的な長身。仕立ての良さが一目でわかる漆黒のスリーピーススーツは、鍛え抜かれた分厚い胸板と広い肩幅を寸分の狂いもなく包み込んでいる。

そして何より——暴力的なまでに整った、その美貌。彫刻のように高い鼻梁に、鋭く引き締まったフェイスライン。琥珀がかった切れ長の瞳は、一切の感情を寄せ付けない冷たさを湛えている。ほんのり日焼けした肌の、頬から顎にかけて浅く走る傷跡さえも、爛れた凄みと甘い毒のような色気を放っていた。

（な、に……この人……）

周囲のチンピラたちが放つ卑俗な匂いを、その男が纏う沈香が一瞬で塗り替えていく。恐怖と見惚れが混ざり合った異様な静寂の中で、カントボーイたちの視線が、磁石のようにその男へと吸い寄せられていく。

僕もまた、底知れない威圧感に縛り付けられたように盗み見ていた——その時だった。

男の視線が、ふと僕のところでピタリと止まった。

「っ……！」

吸い込まれそうな琥珀の瞳が、わずかに見開かれる。

心臓を素手で掴まれたような悪寒が走り、背筋が粟立った。逃げ場のない檻の中で、大型の肉食獣に急所を正確に捉えられたような感覚。男は眉ひとつ動かさず、値踏みするように、舐め回すように、僕の顔から爪先までをじっと凝視してくる。

まずい、睨み返したと思われたのだろうか。怒らせたら、ここで首をへし折られて殺されるかもしれない。

恐怖で指先を震わせていると、男は視線を僕に固定したまま、隣に控えていた片言のブローカーに低く語りかけた。耳慣れない流暢な外国語。低く響くバリトンボイスは、どこか艶っぽく、それでいて絶対的な命令の響きを含んでいる。

ブローカーの男がすぐさま職員を呼びつけているのが見えた。

言葉の意味は分からない。けれど、あの底知れない男

の目が、僕を捉えて離さない。冷たい汗が背中を伝い落ちる中、僕は自分の運命が、とんでもなく凶悪な何かに捕まってしまったことを本能で悟っていた。

ブローカーと話し込んでいた施設職員が、弾かれたようにこちらへ振り返り、甲高い声を張り上げる。

「ツバキ！ お前に買い手がついた。おい、ぐずぐずするな、こっちへ来い！」

周囲のカントボーイたちが、同情と安堵が入り混じった視線を僕に向ける。

ああ、本当におしまいだ。僕の取り柄なんて、せいぜいこの顔立ちくらいのもの。どこか海の向こうの違法風俗にでも売り飛ばされて、声も出なくなるまで使い潰されるに違いない。

震える足に無理やり力を込めて、男たちの前へと進み出る。床に縫い付けられた視線を、おずおずと持ち上げた。

「こいつは俺が引き取る」

低く、どこまでも耳朶を震わせるバリトンボイス。名指しされた僕よりも先に、血相を変えたのは職員だっ

た。営業用のへつらい笑いを浮かべながら、僕の首に巻かれたプラスチックのタグを無遠慮に掴んでみせる。

「や、八重やえがし榎様、本当によろしいのですか？ こいつは見ての通りの欠陥品、感度最悪のEランクでございます。上のフロアでAランクをご購入いただければ、おまけとしてタダでお付けしますので、ぜひ上の子たちもご覧になっては——」
「手を離せ」

室内の温度が、数度下がったような錯覚を覚えた。八重榎と呼ばれた男の琥珀の瞳が、薄氷のような冷徹さで職員の手元を射抜いている。職員は小さく悲鳴を呑み込み、弾かれたように僕の首輪から手を引っ込めた。

「俺は余計な買い物はしねえ。引き取るのはこいつ一人だ。他の手配はハオラン浩然に任せる」

脇で控えていたスーツの男が短く頷き、引きつった笑みを浮かべる職員を連れて奥の事務ブースへと消えていく。

取り残されたフロアで、十九〇センチ近い巨躯と真正面から向き合う形になった。見上げるだけで首が痛くなるほどの威圧感に、呼吸が浅くなる。

男は彫刻のような長身をわずかに屈め、僕の顔を検分するように覗き込んできた。大きな、革手袋に包まれた指先が伸びてきて、僕の強張った顎先をそっと掬い上げる。乱暴にされる覚悟で目を瞑りかけた僕の耳元に、思いのほか穏やかな声が落ちてきた。

「名前はい」

「つ……ツバキ、と申します……」

震える唇で、絞り出すように答える。男は僕の怯えた瞳をまじまじと見つめたあと、満足そうに低く喉を鳴らした。

「椿か。今日から——俺が、お前の飼い主だ」

顎を撫でる革の冷たい感触と、男の身体から立ち上る沈香の匂いに、全身が粟立つ。

こうして、僕の新しい地獄が幕を開けた。これからどんな酷い仕打ちが待っているのかも分からないまま、僕は男の冷たい美貌から目を逸らし、ただ小さく頷くことしかできなかった。

プラスチックのタグを外された首筋が、妙に寒々し

い。

僕は八重樫の広すぎるタワーマンションに連れてこられ、大理石の浴室で一人身体を洗っていた。

(……なんで、わざわざ丁寧に風呂なんか入れさせたんだろう)

てっきり粗末なベッドに転がされ、すぐにブローカーに引き渡されるものだとばかり思っていた。困惑したまま、脱衣所に用意されていたバスタオルで身体を隠してリビングへ戻る。

革張りの大きなソファに深く腰掛けていた八重樫が、音もなく視線を持ち上げた。施設で見た氷のような冷徹さとは違い、その琥珀の瞳には、じっとりと粘りつくような熱が灯っている。

「多少はカビ臭さもマシになったな……バスタオル脱いで、ここに来い」

八重樫が、自身の逞しい太股を軽く叩いた。

全裸で膝の上に跨れ、だって？ 何をされるのか分からない恐怖で喉がカラカラに渴く。けれど、逆らう術を持たない僕は、震える手でバスタオルを地面に落とし、

一糸纏わぬ身体をその分厚い膝の上へと乗せた。

「……っ」

上等なスラックスのウール生地越しに、男の熱い体温が、無防備な尻と秘部に直接伝わってくる。

八重樫の視線が、僕の顔から首筋、胸元へと滑り落ちていく。ただの愛玩動物を見る目ではない。喉から手が出るほど欲しかった獲物を、ようやく檻に閉じ込めた猛獣のような瞳だ。

沈黙に耐えかねて身を竦めた瞬間、分厚い両腕が僕の腰を引き寄せ、逃げ場のない力で抱き竦めた。

「うわ……っ!？」

「……やっと、見つけた」

耳朶に吹き込まれたのは、熱を帯びた掠れ声。大きな手のひらが、剥き出しの背骨をなぞり、腰の窪みへと滑り落ちていく。怯えて震える僕をなだめるように、指先が熱い体温を刷り込んでくる。

「ずっと探してたんだよ、お前みたいな顔を。……怯えて泣きそうなくせに、人を惹きつけて離さない、極上の顔——お前を、俺のモノにしたい」

「も、モノって……僕のことを買ってくださったんですから、もう貴方のモノでは……」

「分かってねえな」

八重樫が低く喉を鳴らして笑う。指先が唇を割り、湿った粘膜を軽く押し開いてきた。至近距離で見つめられる美貌は凶悪なまでに迫力があり、鉄火場をくぐり抜けてきた男の放つ生々しい色気に眩暈がする。

「身体だけなら、金を出せばいくらでも買える。俺が欲しいのは、そんな薄っぺらいもんじゃない」

ぐっと腰を抱き寄せられ、下腹部に硬い熱塊が押し当てられる。

「お前のその瑠璃の奥が、全部俺への欲で濁る瞬間が見てえんだよ。……誰にも触らせない、俺だけのモノに仕立て上げてやる」

けれど、僕はあの感度調査で「開発不能」の烙印を押された欠陥品だ。こんな暴力的な男に抱かれて、快感を得られる日なんて来るはずがない。

(でも……なんとか気に入られないと、今度こそ処分されてしまう)

性的不能だと見限られれば、この居場所もすぐに失われる。捨てるか殺すかの二者択一しかない裏社会なら、なおさらだ。

僕は生き延びるために、引きつりそうな笑みを浮かべて、彼の逞しい首筋にそっと両腕を回した。

「僕の身体で良ければ……どうぞ、お好きなように、お使いください」

恐怖に竦む自分の身体を見たくなくて、ぎゅっと固く目をつむる。しかし、僕の唇に落ちてきたのは、予想だにしなかった、蕩けるような熱だった。

ちゅっ……♡　ちゅう、ちゅっ……♡♡

八重樫は下から覗き込むようにして、僕の唇に柔らかい愛撫を施し始める。味わったことのない甘やかな感触に、思考が追いつかない。触れるだけのリップ音が静かな室内に小さく爆ぜるたび、頭の芯がじんわりと痺れていく。どう応じればいいのかも分からず、ただ半開きの唇でその温もりを受け止めるしかなかった。

「キスの経験もないお子ちゃまか？　最高にそそるな、育てがいがあがる」

ぢゅむっ♡ ぢゅう♡ぢゅう♡ぢゅうう~~~~~
~……っ♡

(あ、これ、なに……っ？ あたまが、ふわふわして……
っ)

施設で行われた感度調査には、キスの項目なんて存在しなかった。当然、僕は口付けの仕方なんて教わっていないし、誰かに触れられたことすらない。それなのに——手練れの男が降らせるキスの雨に打たれているだけで、僕の身体の奥深くに、これまでにない異変が起き始めていた。

腰の奥がきゅうと甘く疼き、未知の痺れが背骨を駆け上がっていく。乾いて冷え切っていたはずの身体の奥が、じんわりと湿り気を帯びていくような錯覚。少しかさついた唇が、啄むように小さな苺を何度も甘噛みする。

未知の快感に慄いて身を引こうとした瞬間、後頭部に大きな手が回り込み、逃げ道を塞がれた。閉じかけた唇の隙間をこじ開けるように、分厚い舌が割り込んでくる。

「ん、あ……っ、んんう……っ！」

歯列をなぞられ、敏感な上顎をねっとりと舐め上げられる。逃げ場を失った僕の舌が絡め取られ、口内の奥深くまで執拗に貪り尽くされていく。

息ができない。鼻腔を満たすのは、八重樫が纏う煙草と沈香の匂い。唾液を吸い上げられるたびに下腹の奥がじくじくと疼き、無意識に腰が跳ねてしまう。

ちゅるっ！♡　ずずっ、ちゅるちゅるちゅる……っ♡

濡れた水音が重なり、口の端から溢れた熱い蜜が顎を伝い落ちる。

(ああ……、キスって、こんな……こんなに、気持ちいいの……？)

相手は、これから自分を殺すかもしれないヤクザの男なのだ。警戒しなければいけないのに、頭を満たす甘い陶酔と、注ぎ込まれる凶暴なほどの熱気に、僕の心も身体もあっけなく蕩かされそうになっていた。

目を瞑ったまま身体の疼きに耐えていると、口を離れた八重樫が耳元で熱く囁いてきた。

「椿……お前、本当にEランクか？」

「え？　あ、はい、そうで、す……」

質問の意図を汲み取れず、細い声で返事をした瞬間だった。

大きな手が、太股の内側から秘部へと滑り込んでくる。無遠慮な指先が、男の身体に刻まれた愛玩用の裂け目を、ぬちゃりと浅く撫で上げた。

「あ……っ！」

「……これは何だ？ あいつらは、キスだけでここから蜜を垂らすような極上品も、Eランク扱いにすんのか」

思わず目を見開き、男の指先を見つめる。

分厚い指の腹に絡みついていたのは、照明を反射して糸を引く、粘り気のある透明な液体だった。これは——僕の、愛液……？

（え……!? そ、そんなわけない、僕は感度調査で一回も濡れなかったのに……!）

信じがたい現実言葉に失っていると、頭上から低く、喉を鳴らすような囁い声が落ちてきた。

「……くく、傑作だな。あいつら、余程下手くそだったんだろ」

琥珀の瞳の奥が、欲で仄暗く光っている。

「これだけの顔と中身で『欠陥品』扱いか。……節穴どもめ、おかげで俺が拾えたがな」

八重樫は僕を膝に乗せたまま、大きな掌で胸元の突起をそっと覆った。

乱暴に抓るようなことは一切せず、熱い指の腹で、小さな粒を慈しむように転がす。乳輪の周りを焦らすように撫でられ、先端を弾かれるたび、脳天を突き抜けるような痺れが走る。

執拗な乳首責めに、僕の口からは自分でも信じられないような甘い嬌声が零れ落ちていた。

「どうだ……見えるか、椿。お前の『白酒』で、俺のスラックスがびしょ濡れだ。……どこが無感症だ、エロい身体しやがって」

「あ、も、申し訳ございません……！ お召し物を汚してしまって……っ！」

湿った太股の感触に血の気が引き、思考が一気に現実に取り戻される。

飼い主の服を汚すなんて重大な粗相だ。青ざめて謝り倒す僕を、八重樫は力強い腕で軽々と抱き上げた。

「……もっと汚せ」

低く囁かれたかと思うと、そのまま寝室へと連行された。

キングサイズのベッドに沈められ、見上げる間もなく、二メートルほどの巨躯が覆いかぶさってくる。両脚をあっさり割られ、逃げ場を完全に塞がれた。

「ごめっ、ごめんなさい……っ！　もうお召し物を汚したりしません、お願いですから命だけは……っ!!」

「椿。——お前、煽ってんのか？」

覆い被さる男の首筋に、青筋が浮かんでいた。

至近距離で睨みつけてくる美貌には、もはや余裕の笑みなど微塵もない。剥き出しの獰猛な雄の欲望が、僕を押し潰そうとしている。

「これでも必死に手加減してやってんだ……それ以上そそる顔で啼いたら、今夜だけで壊しちまう」

「ち、ちが……っ」

八重樫は荒い息を吐きながら、スラックスのジッパーを一気に引き下げた。

勢いよく飛び出した雄竿が揺れて、先端から蜜を溢れさせている。それは赤銅色に艶光り、茎根は脈打つように熱い血を滾らせていた。

感度調査師のそれとは比べるべくもない、凄まじいサイズの陽根に息を呑む。あんな凶器のようなものを振じ込まれたら、身体は裂けて壊れてしまう。

恐怖で肩を硬直させた僕を、八重樫の大きな掌がなだめるように包み込んだ。すぐに熱い唇が重なり、再び口内を満たすような深いキスが降ってくる。

「はあっ、あ、あ……っ、こわい、怖い……っ、痛いのはいやあ……っ」

気付けば目尻から大粒の涙が溢れ、子供のようにしゃくり上げていた。

性交中に泣き喚くなんて、愛玩動物として失格だ。捨てられる、壊される——そう思って身を縮めたのに、僕の泣き顔を見下ろす八重樫の琥珀の瞳は、狂おしいほどの情欲に濁りきっていた。

じゅるじゅると舌を吸う、いやらしい音が寝室に響く。恐怖とは裏腹に、淫らな蜜に濡れた二枚の淡紅色の肉羽が、淡い照明に照らされてぬるぬると光っていた。

「心配すんな。手荒い真似はしねえ」
「ううっ、でも、こんなおっきいの、挿入るわけ……っ」

言い終える間もなく、濡れた先端が割れ目を押し分けてあてがわれた。ずぶり、と鈍い水音を立てて、太い亀頭が無理やり内部へと潜り込んでくる。

「……っ、あ、ぐう……っ！」

めりめりと肉壁が押し広げられ、狭い腔内が八重檜の熱塊で埋め尽くされていく。

拒絶するように締め付ける僕の腰を大きな手がかっしりと押さえつけ、徐々に、けれど確実に、太い肉棹が半分まで呑み込まれてしまった。

「はあっ、あ、あああ——……っ！　く、くるしい、お願い、ゆっくりして、くださ……ああ……っ！」
「……これ以上、待たせる気か。ご主人様を焦らすとはいい身分だな」

八重檜の額から汗が滴り落ちる。濡れて張り付いた前

髪の間から覗く鋭い眼差しは、息を呑むほどに凄艶で、雄の色気に満ちていた。

見惚れる隙すら与えられず、さらに腰が深く沈み込んでいく。

ぐぢゅ……っ♡ めりめりめり……っ♡♡ みぢっ、みぢっ、みぢぢぢぢいい!!♡♡

狭隘な洞穴を掘削され、裂けそうなほどの圧迫感に、喉から掠れた悲鳴が零れ落ちた。

「う、うううーっ！ かはっ、はあっ、はあっ……っ！」

根元まで、すべてが胎内へ収まりきった。

腹の奥底に熱い鉄杭を打ち込まれたような重厚な充足感。腹壁の上からでも、男の肉棒の形が浮き出ているのが分かるほどだった。

「おい、締めすぎだ……っ、中までこんな、吸い付いて離さない名器しやがって……」

八重樫が苦しげに喉を鳴らし、繋がったまま僕の唇を塞いできた。息もできないほど激しく舌を絡め取られ、

上からも下からも同時に暴力的な熱を注ぎ込まれる。

裂けるように痛くて苦しかったはずの身体の奥が、ずくずくと熱い痺れを放ち始めていた。埋め尽くされた異物感はいつの間にか抗えない快感へと変わり、僕の肉壁は、もっと奥を突いてほしいと叫ぶように八重樫の雄竿へとしがみついていた。

八重樫は勢いよくワイシャツを脱ぎ捨てて、ベッド脇に放り投げた。胸元から肩、そして背中にかけて施された色鮮やかな和彫りが、視界を圧迫するように埋め尽くしていく。

汗の滲む八重樫の背中にしがみつки、彼から与えられる容赦ない熱を必死に受け止めた。性交の経験があるとはいえ、これほどの巨根を受け入れるとなると話は別だ。わずかに肉竿を引き抜かれる摩擦にさえ、身体が悲鳴を上げて強張ってしまう。

「……早く俺のに慣れろ。ご主人様のチンポ啜えられないやつは、飼い犬失格だ」

ずちゅう……♡ずちゅう……♡ ぬぶぷ……っ♡

「はあ、あう、ご、めんなさ、い……っ、あ……」

幾度も太い棹で擦られ、ようやく身体が異物の大きさに馴染み始めてきた頃。八重樫がぐっと腰を引き、カリの段差で膣内のある一点を抉るように擦り上げた瞬間——痺れるような快感が、背中を走り抜けた。

「あっ!?♡ い、いまの、何……っ!?」
「イイとこ擦ったんだろ。裏クリトリスつつってな……
啼かずにはいられなくなる急所だ」

長い指がクリトリスをぎゅう♡とつまみ上げる。八重樫は浅く腰を揺らしながら、敏感な突起を指の腹で転がし始めた。

ぢゅこっ♡ にぢ♡にぢにぢにぢ♡ ぢゅこぢゅこ
ぢゅこ!!♡♡♡

「あうっ!?♡ やっ、やだっ、苦しいよおっ!!♡ そこ
いじめないでっ、いやっ、こんなこと聞いてないっ、い
いゝ〜ッ♡!!♡」

「ハッ、調査師ってのはよっぽどナメた仕事してんだな。
クリの感度確認もしてねえのか」

何度も指で擦られるうちにクリの薄皮が弾けて、淡い
ピンク色をした瑞々しい若芽が、恥ずかしげに顔を覗か
せる。

飛び出した敏感な先端をぬるり♡と熱い指の腹で弾かれた瞬間、僕の背中が弓なりに跳ね上がっていた。

薄い皮一枚が剥けただけで、押し寄せる快感の桁がまるで違う。自分がびしょ濡れになっているという事実すら追いつかないまま、耳も、唇も、そして胎内までも——全身の細胞すべてが、八重樫の熱に侵食されていく。

「あっ、ああ、もうダメっ、お願いします……これ以上おまんこ弄られたら、僕はもう……っ!!♡♡」

「チンポこれだけ締め付けておいて、何がダメなんだ？
初めてこんなに感じたから許してくれってか？」

ぐぢゅっ!!♡ぐぢゅっ!!♡ぐぢゅっ!!♡ぐぢゅっ!!♡

「いやですっ、きちゃう!!♡ おまんこ、こんなに感じるわけないっ、なのにつ、なのにな……っ!!♡ きもちいの、きちゃうよおおッ!!♡ おねがい、たすけてっ!!♡♡♡」

泣きながら止めてと懇願すればするほど、八重樫の腰の打ち込みは獐猛に加速していく。

長大な肉竿が奥深くまで沈み込み、敏感なスイッチを容赦なく叩き潰した瞬間——蜜壺の奥に、強烈な電流

が走った。

「ああッ!!♡ だめ、だめだめだめ、イ————……ッ
ッッ!!♡♡♡」

びくん!!♡と一際大きく身体が痙攣し、僕は生まれて初めて味わう絶頂の狂気に呑み込まれた。

不感症の烙印を押されていたはずの僕が、イカされた
——……!?

「やっぱり俺の見立て通りだ——……椿、お前はEランクなんかじゃない」

腹の奥底に繋がれたままの八重樫の熱塊が、さらに硬度と質量を増していく。僕は息を詰まらせ、はくはくと唇を戦慄かせながら、乱れたシーツを必死に握りしめた。

「俺が開発してやるよ。誰にも不良品だなんて言わせねえ——俺だけのモノが、世界で一番の上玉だってこと、今夜証明してやろうじゃねえか」

巨軀が再び覆いかぶさり、僕の視界を真っ暗に塗り潰す。

まだ終わらない。むしろ、本当の調教は今始まったばかりなのだと理解した瞬間、僕の意識はとろけるような熱い快楽の底へと沈んでいった。

ここまでお読みくださりありがとうございました♡

【サンプル以降の収録内容】

- ・ 広すぎるベッドで眠れない椿に、無言で添い寝してくれる極道の不器用な溺愛
- ・ 他の男に触られかけ、理性が焼き切れた八重樫の「執着・匂い上書きマーキング生中出し」

【購入者特典のおまけ】

本妻になった椿と八重樫のその後を覗き見♡エッチな書き下ろしもご用意しております！